先制医療

中原 悦夫（医療法人社団 協立歯科 クリニーク デュボワ院長、
日本歯科大学生命歯学部客員教授、神奈川歯科大学歯学部客員教授）

これまでの歯科医療は、虫歯や歯周病に対して後手後手に対処してきた歴史の上に成り立ってきました。また、それは 16 世紀の大航海時代の到来による砂糖の世界的流通により近代齲蝕(うしょく)が大発生したことから、医療が「医科」から「歯科」を分離して虫歯の治療に特化してきた時代の名残でもあるのです。

医学の歴史をひも解いてみると、「どうして？」「どのように？」という“how”を探り“know-how（ノウハウ）”を蓄積してきました。しかし「なぜ？」という根源的な理由である“Why”を探ることには医学は無関心でした。しかし、今世紀に入ってから遺伝子レベルや分子レベルの進化論に基づいた医学的研究が飛躍的に発展し、病気の起源、つまり、“know-why”（病気になる理由）が少しずつわかってきました。

例えば、「虫歯はどうして、あるいはどのようになるのか？」については、「甘いものを食べるから。」あるいは「原因菌がショ糖を分解して乳酸を作るから。」だから「甘いものを控えて、しっかり歯磨きしよう！」という“know-how”になったわけです。それでも、「なぜ、歯磨きをしなくても虫歯や歯周病にならない人がいるのか？」という疑問にはこれまで無関心でした。

しかし、このような疑問をひも解いて得られたのが“know-why”なのです。虫歯や歯周病の原因菌といわれる口腔内常在菌は多細胞生物が発生した 10 億年前から既に共生関係にあるわけですから当然歯周病には遺伝子との関連があります。細菌のもつ毒性による影響、唾液や体質の酸性化の問題、平均体温の低下、免疫力や細胞膜の強度などを左右する分子レベルでの栄養状態、細胞内のミネラルバランスの乱れや有害金属の毒性、血糖調節能の乱れによる低血糖状態と歯ぎしり食い縛りによる様々なトラブル、頚部並びに全身のさまざまな筋肉の硬直や姿勢の乱れなど、虫歯や歯周病になる本当の理由“why”を探っていくと、口腔内だけの問題ではなく、現状の全身の生理的状態や細胞内の生化学的状態と密接な関係があるとともに、その起源は進化の過程に端を発しているということが次第に明らかにされてきました。

一方、歯や歯茎のある口腔は内蔵の最先端突出部位であり、捕食後の消化器官の一部ですが、人類としてチンパンジーから進化する以前の進化の過程をひも解くと、表情を作る顔や口元、発音や構音を掌(つかさど)る舌や口腔、そして発生を担う声帯は、どれも人類の特徴である情動を表現する器官でもあるのです。つまり、口元は消化器官と同時に、心の表現をも担うという人類の最たる特徴を掌(つかさど)っているわけです。

こうして見ると、人間社会の特徴である精神性と社会性と直接関わりのある口元には精神医学の一分野として審美性が要求されるのは当然なことです。その意味では、『究極の「審美」とは、自分がもって生まれた歯を、白いまま美しいかたちで生涯保ち続けること』。つまり審美歯科といえども予防医学そのものなのです。

“know-why”（病気になる理由）がわかれば、戦略的に病気を先制することが出来ます。口腔二大疾患といわれる虫歯や歯周病を先制することは、同時に糖尿病、心臓病、脳血管疾患、肺炎、流産など様々な全身的疾患をも先制することに繋がります。

このように先制医療の実際は、「虫歯や歯周病は、もはや罹患するのが難しい病気」なのです。